

# HELENE

playwriting/ **Euripides** 原作/エウリピデス  
translation, adaptation, & dramaturgy/ **Tange Kazuhiko** 原作翻訳・補綴・ドラマトウルク/丹下和彦  
adaptation & direction/ **Tanaka Atsuya** 構成・演出/田中孝弥

清流劇場 2020年10月公演

## 逃げるヘレネ

HELENE he phygas

cast/ 出演

**Nishida Masahiko** 西田政彦 遊氣舎  
**Takaguchi Shingo** 高口真吾  
**Kuramasu Tessyuu** 倉増哲州 南森町クラスホッパーズ  
**Hattori Momoko** 服部桃子  
**Nagatsu Mana** 永津真奈 Aripe  
**Sogi Akoya** 曾木亜古弥  
**Katsumata Ryohei** 勝又諒平  
**Tsuji Tomoyuki** 辻智之 Le théâtre café  
**Kimata Akiko** 木全晶子

composition & piano/ 音楽・演奏

**Semba Hirofumi** 仙波宏文

今回のお芝居は、ヘレネという絶世の美女を巡る物語です。「トロイの木馬」で有名なトロイア戦争を引き起こした、原因の女性です。一般には、悪女として知られていますが、本作品では異伝が用いられ、〈貞女ヘレネ〉が描かれます。詳細については、「丹下先生の作品解題」や「ものがたり（あらすじ）」に譲りますが、簡潔に申しますと、ギリシア軍がトロイア戦争に勝利し取り戻したのは、〈幻のヘレネ〉だったのです。〈本物のヘレネ〉はエジプトの地で保護され、夫の助けを待ち続けているのです。この作品には、〈幻〉と〈本物〉という言葉が頻繁に出て来ます。

## ご挨拶

清流劇場 代表 田中孝弥

adaptation & direction/ Tanaka Atsuya

どうやら、演出するには、この二つの言葉について考えを巡らさなければならないようです。

これまで『オイディプス王』や『メデシア』などのギリシア悲劇に取り組んできたボクは、無意識のうちに、「ギリシア悲劇というのは、荘厳なものだ」と思い込んでいた節があります。ギリシア劇勉強会などを通じて、丹下先生に「そんな悲劇ばかりがギリシア悲劇ではない」と教えていただいても、まだ頭の隅のどこかで〈2400年の風雪に耐えてきたギリシア劇〉に対して、なにか〈聖なるもの〉を勝手に感じていました。昨年『アルケステリス』という笑劇に取り組み、今回もまた『ヘレネ』を演出することによって、ようやくその先入観という〈幻〉から解き放たれたように感じています。大仰に捉える必要はありません。ギリシア悲劇も現代劇と同じく、「人間を描く」ことに変わりはありません。

そして、〈幻〉から解き放たれたボクが演出ブラ

ンを考えながら、『ヘレネ』のテキストを読んでいますと、この作品を書いたエウリピデスと魂の交流をしているような気がしてきました。〈幻のエウリピデス〉に、〈人間とは何か〉〈人間へ向ける眼差し〉について、教えてもらっているような気がしてきたのです。

エウリピデス「アンタな、見た目とか周りの目とか、気にし過ぎ。どうでもエエねん。もっと本質的なことを見なあかん。とにかくまず〈人間とは何ぞや?〉と、自分に深く問うてみたらどないや。

——アンタが思てるより、人間はもっとしなやかで、繊細な生き物や。そやけどもまた、時に頑なで、図太い生き物やったりする。」

ボク「人物描写の時、そこんトコを緩めたり締めたりする加減が、これまた難しいですね。」

エウリピデス「難しいやない、楽しいや。アンタは、まだまだ本物やないね。人を見る目がない。」

ボク「そうなんです、全く、どないしたらエエんでしょ? エウリピデス先生は、ご自身の実体験が作品に昇華されてますよね。2人の奥様に裏切られ、辛く苦しい悲しみを乗り越えて、つかみ取りはった〈透き通った明るさ〉が見えます。」

エウリピデス「貴様、ワシをバカにしてるんか?」

ボク「とんでもない! 先生のテキストを稽古していて、セリフ運びがうまくいきますと、稽古場は透き通った明るさに包まれて、静謐な時間が流れるんです。」

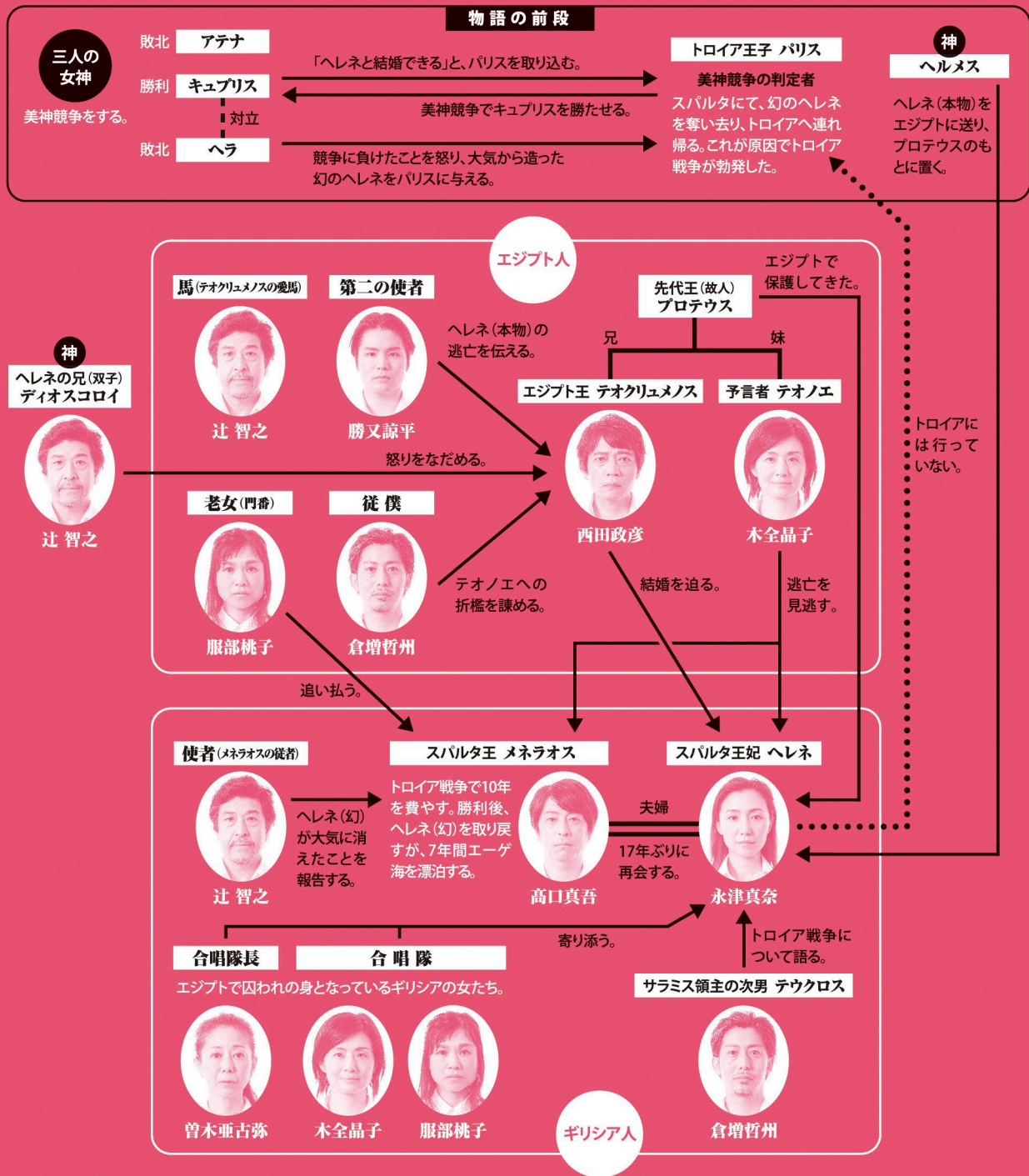
エウリピデス「人を見る目もないし、人望もないから、2回も妻に逃げられた言うんか! ワシも本物やないとも言うんか? 失敬する!」

ボク「先生〜!」

と、ボクは〈幻のエウリピデス〉の背中を見ながら、人間という巨大な宇宙の〈本物〉のひとかけらでもいいから、つかみたいと思いました。

コロナ禍の下、わざわざ劇場まで足をお運びいただき、誠にありがとうございます。ごゆっくりお楽しみくださいませ。

# Person correlation diagram 人物相関図



## Story ものがたり

スパルタ王妃ヘレネは来訪したトロイア王子パリスに恋をし、夫メネラオスを捨ててトロイアへ駆け落ちする。そのヘレネを取り戻そうと、メネラオスはトロイア遠征軍を起こし、10年戦争の末、妻奪還に成功する。ヘレネは「トロイア戦争」を引き起こした問題の女性。これが、私たちが知る一般的なヘレネ伝説です。ところが、ヘレネはトロイアへは行かず、実は神の計らいでエジプトに居て、トロイアへ行ったのは神が雲から造った「幻のヘレネ」だった、という異伝があります。悪女ヘレネに代わる、いわば貞女ヘレネの物語です。エウリピデスの『ヘレネ』はこの異伝に拠っています。

スパルタ王メネラオスは10年のトロイア戦争の後、妻ヘレネ(幻)と共に、帰途洋上を7年間放浪し、難破してエジプトに漂着します。メネラオスは、生き残った部下たちにヘレネを守らせ、エジプト王の屋敷に援助を求めて赴きます。ところがそこで、またヘレネ(本物)と出くわします。困惑するメネラオス。そんな折、部下の一人が知らせを持って来ます。苦勞して取り戻した妻ヘレネは雲から造られた幻で、先程、昇天し消失したとのこと。今、目の前に居る女性こそ、本物のヘレネであることが明らかになります。17年ぶりの再会を喜ぶ二人。早速、メネラオスはヘレネを連れて帰ろうとしますが、実のところ、ヘレネはエジプト王から求婚されています。夫がやって来たとなれば、王は怒って殺してしまうでしょう。しかも、ひそかにエジプトを脱出しようにも、難破した時に船は粉々に壊れてしまっています。二人は無事にスパルタへ帰るため、「ある作戦」に打って出ます。



Nishida Masahiko

Takaguchi Shingo

cast/

**SERVANT**  
Nishida Masahiko  
Takaguchi Shingo  
Kuramasu Tessyuu  
Hattori Momoko

**HELP**  
Nagatsu Mana  
Sogi Akoya  
Katsumata Ryohei  
Tsuji Tomoyuki  
Kimata Akiko

composition & piano/

**Semba Hirofumi**

Sogi Akoya

Katsumata Ryohei

Kuramasu Tessyuu

Hattori Momoko

Nagatsu Mana

# THEATER

# ENCE

playwriting/ **Euripides**  
translation, adaptation, & dramaturgy/ **Tange Kazuhiko**  
adaptation & direction/ **Tanaka Atsuya**

Tsuji Tomoyuki

Kimata Akiko

Semba Hirofumi



エウリピデスの『ヘレネ』は面白い作品です。おや、と思わせる幾つかの点が劇中に散りばめられています。素材はヘレネ伝説ですが、異伝を使っています。ヘレネはトロイアへは行かなかった、行ったのはヘラ女神が雲から作った偽のヘレネで、本物はエジプトにいた、という設定です。これが第一の点です。

トロイアでは両軍の兵士が多数命を落としましたが、彼らは偽のヘレネ、幻

エ、その従僕などです。多数の多様な人物の登場は劇の非悲劇的性格を助長します。作者とほぼ同世代の喜劇作家アリストパネスは芝居の見巧者で、悲劇上演の席によく足を運び、その劇評や作家論を自作中で展開した人ですが、多数の登場人物が身分、性別、年齢の違いを超えて議論する状況を「民主的」だとしています。民主的とは喜劇的ということです。これが第三の点です。

## 『ヘレネ』から『逃げるヘレネ』へ

大阪市立大学名誉教授・古代ギリシア文学者 丹下和彦

translation, adaptation, & dramaturgy/ Tange Kazuhiko

のヘレネ、名前だけのヘレネを的に戦ったこととなります。ヘレネはそのことを知っていて、自分の名前が不幸を招いたことに心を痛め悲嘆にくれますが、しかし自分の身の成り行きについては楽観的です。夫との再会も、スパルタへの帰国もかなうと、ヘルメス神から聞かされているからです。彼女は悲劇的人物にはなれません。悲劇的人物とは神の意志と人間の運命とのあいだに問いを立て、その関係に主体的にかかわっていく人間のことですから。これが第二の点です。

他の登場人物も同様に悲劇的相貌は濃くありません。多様な人物が多く登場します。ヘレネ、その夫メネラオス、エジプト王テオクリュメノス、トロイア帰りの戦士テウクロス、門番の老女、メネラオスの召使、エジプト王の妹テオノ

この劇には真贋二人のヘレネが登場します。テウクロスもメネラオスもトロイアのヘレネを本物だと思っていますから、エジプトで本物に出会ってもその真贋の見分けに悩まされます。このとき真贋二人のヘレネを同一場面に登場させれば、周囲の者は両者を取り違えて大騒動になるでしょう。のちのローマ喜劇でよく使われた「取り違えクイ・プロ・クオ」という手法です。しかし『ヘレネ』はそこまでいきません。寸前で止まっています。エウリピデスは喜劇作家になり損ねたわけです。それでもヘレネ消失を報告に来た召使が本物を目前にして取り違え、逃げた偽物と思いついでその行為を非難するところなどは、観客も一瞬笑いをこらえきれないところでしよう。これが第四の点です。

またこの劇では舞台上での二人の併

優による1行ずつの対話シーンがよく出てきます。1行対話にはスピード感、緊迫感があります。劇は動的になります。主人公の心中の悩みを長い独白で表示する旧来の悲劇（メデリアの子供殺害前の60行に及ぶ逡巡の場を思い出してください）とは違って、主人公は悩みません。悩みはあっても、それは他の人間たちとの対話によって共有されます。悩みも民主的になるのです。これが第五の点です。

この劇ではヘレネはトロイアではなくエジプトにいます。トロイアにあるのはヘレネという名前だけです。名前と実体とは分離しているのです。そういう異伝をエウリピデスは採用したのですが、それはなぜでしょうか。同時代の歴史家トゥキュディデスが興味深い考察をしています、前五世紀末の動乱の世では暴勇が勇氣、躊躇が臆病とみなされるようになったと。価値観の混乱状況です。それを歴史家は書物に書き記し、劇作家は舞台上で表現したのです。テウクロスもメネラオスも、トロイアで見たヘレネは偽物でした。ところがエジプトで本物を見ながらそれと認識できません。これは見ることだけでは認識に繋がらないということを示しています。「知性の衰退現象」の一つと言えるでしょう。従来の枠組みでは捉えきれなくなった時代状況を、エウリピデスは「幻のヘレネ」という仮構に託して描いたのです。これが第六の点です。

最後にもう一つ。なぜ本日の上演は『ヘレネ』ではなく『逃げるヘレネ』なのかということです。劇の半ばでヘレネ昇天の報告に来た召使（＝使者）が本物を目前にして言います。

**使者** こちらはイリオンでの苦勞の元になったお方ではないので？

**メネラオス** ないのだ。われらは神さまに騙されていたのだ。雲から作った有害な偶像を手にしたのだ。

**使者** 何ですと？雲のために無駄な苦勞をしたのですと？

**メネラオス** これはヘラの仕業だ。元はといえば三人の女神の争いだ。「雲のために無駄な苦勞をしたのではないか」という使者の問いは鋭い問題提起です。本物が見つかった今、偽物を追ったこれまでの年月は無駄であったのか無駄でなかったのか？実体のヘレネと雲＝幻のヘレネ。美の実体と美の理念。そうした二様の美があること。それに気づくことが重要なのです。作者はメネラオスに「ヘラの仕業だ」と言わせて事足りれとしていますが、それでは許されません。その意味を解くことが重要です。雲のために苦勞することは無駄ではない、むしろ必要なことです。ヘレネという美の実体だけではなく概念をも追い求めること、ヘラは幻のヘレネというトリックを使って、そのことの意味と重要性を教えたのです。それはとりもなおさず作者エウリピデスがわざわざ異伝を使って作劇した意図でもあったはず。本日上演の『逃げるヘレネ』はその意図を推測して舞台上に乗せたものです。これが、いわば第七の点です。

はたして面白くなりましたろうか。

# Euripides PROFILE

作家紹介(原作)

## エウリピデス

紀元前480年(『エウリピデス伝』『スーダ辞典』による)～紀元前406年

ギリシア三大悲劇詩人の一人。

父親ムネサルコスと母親クレイトの間に生まれる。父親は貧しい行商人。母親は市場の野菜売り。アテナイ市もしくはその近くのサラミス島で生まれたとされる。はじめは格闘技の選手を目指す、のちに精神的世界へ関心を示し、プロタゴラスに修辭学を、ソクラテスに倫理学と哲学を学ぶ。アナクサゴラスへも師事するが、彼の学説が「太陽神アポロンへの不敬」とされ、政治的迫害を受けたのを機に、悲劇作家に転身する。その作風は革新的であり、伝統的な悲劇の世界へ知性と日常性を導入した。作品様式面では「機械仕掛けの神(デウス・エクス・マキナ)」という劇作技法を多用したことが特徴的である。紀元前408年、マケドニア王アルケラオスに招かれ、都(ペラ)へ赴く。紀元前406年、マケドニアで客死。

劇壇のライバル・ソポクレスは訃報に接し、丁度競演会の予備行事の場にいたが、喪服に着替えて弔意を表したという。

その容貌については「そばかす、濃いあごひげ」との短評あり。作品は三大悲劇詩人の中で最も多い19編が残存している。

主な作品:『メデリア』『ヒッポリュトス』『エレクトラ』『タウロイ人の地のイピゲネイア』『ヘレネ』『オレステス』『バクコス教の信女たち』等

# SEIRYU THEATER

2020年 10月 14日(水) 14:00・19:00  
15日(木) 19:00  
16日(金) 14:00・19:00  
17日(土) 14:00 (終演後アフタートーク開催)  
18日(日) 14:00

## 会場／一心寺シアター倶楽

大阪市天王寺区逢坂 2-6-13 B1F tel: 06-6774-4002 <http://isshinji.net/kura/index.html>

舞台監督／大野亜希 舞台美術／内山 勉 舞台美術アシスタント／新井真紀  
照明／岩村原太 照明アシスタント／塩見結莉耶 音響／廣瀬義昭 (㈱ティーアンドクレー)  
衣装／木場絵理香 大道具／(㈱)アーティストックポイント 小道具／濱口美也子  
ヘアメイク／島田裕子 ヘアメイク監修／齒染原諭子 (High Shock) 振付／東出ますよ  
写真／古都栄二 (㈱テス・大阪) ビデオ／板倉善之 web・制作協力／飯村登史佳 宣伝美術／黒田武志 (landscape)  
特別協力／森 和雄 演出助手／K-Fluss

協力／(株)舞夢プロ (㈱)ライターズ・カンパニー (株)リモーション (㈱)ウォーターマインド パンタンデザイン研究所大阪校  
柏木貴久子 堀内立誉 田村K-1 日永貴子 八田麻住 佐々木治己 川口典成 森岡慶介

COVID-19感染対策: 動画撮影・編集／板倉善之

提携／一心寺シアター倶楽  
制作／永朋  
企画／一般社団法人清流劇場

アフタートーク出演者／パネラー: 丹下和彦 (清流劇場ドラマツルク・大阪市立大学名誉教授・古代ギリシア文学者) 田中孝弥 (清流劇場代表)  
司会: 古川剛充 (ゲキゲキ劇団『劇団』)

 芸術文化振興基金助成事業

 令和2年度(第75回)文化庁芸術祭参加公演

<https://seiryu-theater.jp>

清流劇場ウェブサイトでは、過去の作品のダイジェスト映像や舞台写真を公開しております。是非、ご覧ください。

お問い合わせ／清流劇場 e-mail: [info@seiryu-theater.jp](mailto:info@seiryu-theater.jp)

清流劇場は公演サポーター(個人様からの寄付)を募集しています。コースと特典リストは清流劇場ウェブサイトにて、ご案内しています。ご支援をよろしくお願いいたします。

ON LINE  
有料配信

ドキュメンタリー映画 『逃げるヘレネ HELENE he phygas』(オンライン公開バージョン)

監督／板倉善之 撮影／佐藤零郎・三木梓沙

●オンライン公開／2020年10月28日(水)～10月31日(土)

●視聴料金／2,500円(公演パンフレット電子版付き) ※視聴チケットの入手方法等、詳細は劇団ウェブサイトをご覧ください。